

特集 三木 靖先生を偲ぶ

三木 靖先生との思い出

～文献史学と城郭研究～

吉本 明弘¹⁾

1) 薩摩川内市川内歴史資料館

1 三木先生との出会い

三木先生との出会いは、平成12年(2000年)夏、私が別府大学4年の時であった。

「島津氏の領国経営における城と都市」というタイトルで文献史学の面から卒業論文を書こうとしており、大学では三木先生の論文を読み漁った。大学4年の夏の帰省時に鹿児島の中世城郭を見て回っていたが、当時は運転免許も持っておらず、電車やバス、あるいは駅から徒歩で中世城郭に辿り着き、そこから登城した。私の中世城郭の原点は、真夏に登るというものであった。中世史サマーセミナーに参加する機会もあり、当学会では8月に中世城郭の見学があったことから、真夏の城郭めぐりは私の中では普通であった。しかし、真夏は蛇・マムシ等が多いことや気候的な面から推奨はされず、私自身も蛇はこの世のものとも思えないくらいの大の苦手であるが、不思議と山城の中で蛇に遭遇した記憶が無い。

中世城郭めぐりと並行して、鹿児島県歴史資料センター黎明館(現、鹿児島県歴史・美術センター黎明館)、鹿児島県立図書館、鹿児島大学附属図書館、鹿児島県立埋蔵文化財センター他、各地の博物館・図書館にもお邪魔させてもらった。三木先生会長の南九州城郭談話会との縁ができたのもこの頃であった。別府大学の後藤重巳先生(近世史)との縁で、学部1年の時に鹿児島大学教育学部の日隈正守先生とお会いしたことがあり、過去にも帰省した時には日隈先生を訪ねて行ったことがあった。この時も日隈先生を訪ねたところ、「鹿児島の城で卒論を書くなら三木靖先生を訪ねなさい」の御言葉で、日隈先生が三木先生にアポを取ってくださり、当時、鹿児島短期大学の学長であった三木先生に会いに行くことになった。一学部生が他大学の学長を訪ねて行くという、当時の私からしたら拝謁に近

い感覚があったが、卒論に向けたアドバイスなどをいただき、また大学院進学のことも考えている話をさせていただいた。多くの縁で三木先生にたどりついたことに感謝したい。その後、別府大学大学院進学も決まり、平成13年(2001)1月、無事に卒論を提出できた。

その年の春、卒業前の帰省時に、三木先生に大学院進学のご報告と卒論を届けるため、改めて鹿児島短期大学の学長室を訪ねた。私の卒論を読んでくださり「うーん、研究史はよくまとまっているね」との御言葉をいただいた。時間的にじっくりお読みいただけたわけではなかったが、「研究史だけかー」と心の中で嘆きながらも、笑顔でお礼をお伝えしたことを覚えている。しかし、その後が続いた三木先生の御言葉は一学部生には衝撃的であった。「次の国際大学の私の部屋に、この資料が入らないからもらってこないか?」というものであった。鹿児島短期大学が鹿児島国際大学短期大学部と変わる時であり、三木先生は短期大学部長に就任されることになっていた。話にあがった資料とは、東京大学史料編纂所編の『大日本史料』や『大日本古文書』等であった。中世史で大学院に進学することになっていた私にとって、学長室壁一面に並ぶ資料群は壮大であり、二つ返事で貰うこととなった。本当に一学部生が貰って良いのか?との思いもあったが、これだけの資料群を貰える学生は他にいないだろうし、この時は三木先生に期待していただけているのかと(勝手に思っただけではあるが)、感極まるものがあり、「やはりこの道を邁進するしかない!」と決意した。その翌月には別府のアパートに約30箱のダンボール箱が送られてきた。しかし、送られてきたときは本当に貰えることになるとは露とも思っておらず、何の準備もしていなかった私は慌てて本棚を調達し、自室の壁一面に並べた。ワンルームであったため、大きな

地震があったら、間違いなく「本に埋もれることになる」という状態であった。今も薩摩川内市のアパートに収蔵している。これだけの資料群をもっと活用できるように研究を進めていかなければならないと常々感じてはいるが、未だ活用しきれてはいない点は否めない。

2 研究の進展と三木先生の御指導

別府大学大学院でも引き続き中世城郭をテーマに、島津氏だけでなく大友氏との関係も含めて修士論文「中世城館の構造と地域社会性—九州を中心として—」に取り組んだ。この頃は、南九州城郭談話会に入会していたものの、会に参加するために鹿児島まで戻ることがなかなか出来ずにいた。それでも三木先生とは年賀状のやり取りを続けさせていただいた。平成15年(2003)、博士前期課程を修了後、大分市教育委員会嘱託を経て、平成16年(2004)6月から川内歴史資料館に指定管理者側の職員(当時は契約職員)として採用され、学芸員として現在に至る。地元に戻ってきてからやっと、定期的に南九州城郭談話会に参加できるようになり、三木先生のフットワークの軽さにもいつも驚いていた。会の幹事になってからは、三木先生にはご迷惑をお掛けすることも増えたが、城の見方等、いつも勉強させていただいた。

平成19年(2007)、私が所属している川内歴史資料館において、特別展「激動の戦国記—島津氏の光と影—」を企画・開催し、関連講演会において三木先生を講師にお招きした。今でこそ増えてきたが、この頃は、中世史研究者で、かつ鹿児島在住の戦国期を中心にした研究者は三木先生しかいなかったと思う。しかしながら、三木先生がいらっしゃったことで、鹿児島の戦国研究・城郭研究が進展したことはいうまでもないだろう。講演には先生のファンも多数来場され、会場がほぼ満席となった。平成23年(2011)、小島摩文編『中世薩摩の雄 渋谷氏』(新薩摩学シリーズ8, 南方新社)が刊行された。この刊行には三木先生や私も執筆者として関わり、私は渋谷氏の城郭関係で執筆することとなった。刊行の前年、鹿児島地域史研究会において、原稿提出に向けた報告をさせてもらった。三木先生も聞きに来られていて緊張した中で報告をさせてもらった。この頃は若気の至りというべきか、室町期から戦国期にかけての史料用例から便宜上、仮称で研究用語を創って報告した。三木先生から「用語を創ることに意味あるのか」という厳しい御言葉をいただいた。この方向性で良いのではないかという考えで報告したため、しばらく迷走し、原稿提出が

予定より遅れた。今となっては完全に若気の至りだったと思う。

また、ある年には、鹿児島国際大学大学院の三木先生の講義が外部にも開かれていたことがあり、半年ではあったが、南九州城郭談話会の幹事数人と一緒に先生の講義を毎週1回夜に受けたことがあった。先生の講義を受けることができたのは今でも私の糧となっている。

3 先生との最後の仕事と将来に向けて

コロナ禍になってからは、私自身、コロナ禍とは別に不調が続き、南九州城郭談話会にも参加できずにいたことが続いた。各種研究会にも参加せず、博物館にも行かず、城郭めぐりも出来なかった。そのような折、吉川弘文館の『九州の名城を歩く』(宮崎・鹿児島編)編集の依頼があり、三木先生にも執筆者として加わっていただいた。この執筆依頼及び編集過程で三木先生に電話したのが、私にとって三木先生の御言葉を直接聞いた最後となった。快く引き受けていただき感謝の念に堪えない。三木先生には、市来本城(市来鶴丸城)、伊集院一宇治城、伊作城(亀丸城)と、先生が昔から関わってこられた城郭を御執筆いただいた。令和5年(2023)9月、先生が御存命中に刊行でき、少しでも恩返しのできたのではないかと勝手ながら思う次第である。

先生はもともと文献史学で城郭を研究され、各城郭の縄張り図作成にも御尽力された。清色城跡(薩摩川内市市来町)は、戦前における福田信男作の平面図(福田信男『薩摩郡に於ける古城址の調査』川内高等女学校, 1937年)と、三木先生作の縄張り図(薩摩川内市教育委員会『史跡清色城跡保存管理計画書』2008年)と対比させることにより、新たに判明することもある。

私は学生の頃から文献史学により中世城郭を見ている。今後もこのスタイルを続け、また考古学や歴史地理学、文献史料についても中世史料だけでなく近世史料も扱いながら研究を続けていく予定でいる。そこには三木先生が本来されてこられた、史料から中世城郭を探る研究を踏襲することにつながることになる。

現在、私は薩摩・大隅の「守護所」について鎌倉・南北朝期を中心に研究している。三木先生や五味克夫先生は国府のある高城郡(薩摩川内市)に島津氏の所職所領がないため、山門院(出水市)に島津氏の本拠地はとどまった、木牟礼城(もしくはその周辺)に守護所が設けられたという見解を打ち出し、それが長い間の通説となっている。そ



川内歴史資料館講演会（2007年9月29日）
三木先生の講演

のことに對し、薩摩については約2年ではあるが北条に守護が代わった点や、鎌倉期の守護代の動向などから別の見解を提示した（吉本明弘「薩摩・大隅の守護所変遷について～中世城郭研究との関係からの一試論～」『四州』中世史研究会報告資料，2023年）。この守護所を考察することにより、これまで不明な点が多かった鎌倉期の「城」の解



南九州城郭談話会出水城跡見学会（2016年5月29日）
中央が三木先生

明などにも寄与できるのではないかと考える。それによって文献史学の立場から中世城郭を考える際、三木先生の研究をどのように発展させることができるのかは、私の今後の課題でもある。先生には今後の研究で恩返しをしていきたい。

最後に、鹿児島の中世城郭研究に御尽力された三木先生の御冥福をお祈り申し上げます。